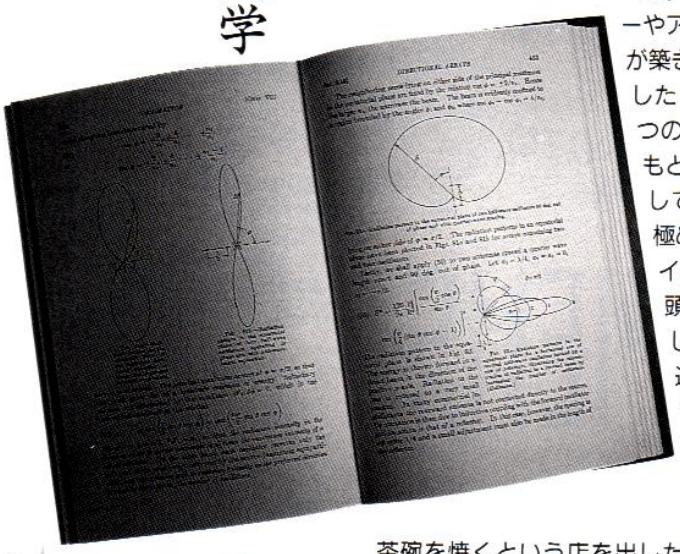
ストラットンの電磁気学

荒川　淳三

先日テレビが、60年の歴史を持つ東京大学駒場寮の取り壊しを報じていましたが、私がここの住人だったのは、37，8年前のことです。

私たちの部屋は「数学研究会」というサークルの2年生3人、1年生3人で構成され、朝7時に起きて夜12時に寝るまで、全員がひたすらに勉強をする毎日でしたが、ある日、高橋という2年生が、どこからか不正出版物のリストを手に入れて来ました。それを見ると、我々が常日頃憧れていた書物が正価の10%くらいの価格で並んでおり、後ろめたさを感じつつも、早速その晩買いに行くことになりました。

1956年2月の雪の夜、私たちは不正出版物の販売元を探して練馬区の桜台のあたりをさまよい歩き、とうとう目指す書物にありついたのですが、私が入手したのは、Strattonという著者の『Electromagnetic Theory』という、数学的美しさと難解さとで有名な電気理論の書物でした。



ストラットンの書物の冒頭には、ファラディーやアンペールを始めとする多くの物理学者達が築き上げてきた電気理論を鮮やかに体系化した「マックスウェルの方程式」という4つの方程式がかかげられ、この方程式をもとに諸々の電気的事象を数学を武器として解明していくのですが、抽象度の極めて高い内容をかみ砕いて具体的なイメージを描くのは、大学2年生の頭脳には本当に大変でした。

しかし、大枚1000円を投じた書物を途中で投げ出すわけにはいかず、その後1年ほど、この書物に一心不乱に取り組みました。

その年の秋の駒場祭では、客が好きなことを書いた湯飲み茶碗を焼くという店を出したサークルがあったので、私はマックスウェルの方程式を焼き込んだ湯飲み茶碗を作り、この方程式を見ながらお茶を飲むなどしました。

この難解な600ページの書物も、ページ数以上の時間数をかけて二度読み返すことで、まずは納得のいく程度に理解することができましたが、このときの疲労は、今も脳の中央部やや右あたりに残っているような気がします。そして、このときに鍛えた思考能力が、いまもしっかりと役立っているのを実感できます。学生諸君への講義で、私はときどき「学問に励みなさい、頭の空っぽな人間がいかに頑張っても、出来ることは知れているのだ」と憎まれ口を叩きますが、この憎まれ口も上記の実感に裏打ちされているのです。

〔経営学部教授〕